フェティッシュな時代

初版発行　1987年8月25日
第二刷発行　1987年9月25日

著者　古井由吉，田中康夫

発行者　金田太郎
発行　株式会社トレヴィル
東京都渋谷区松濤2-11-17-203　〒150　電話(03)481-5611(代表)

発売　株式会社リブロポート
東京都豊島区南池袋1-16-22　〒171　電話(03)983-6191(代表)

印刷　誠和印刷株式会社
製本　大口製本印刷株式会社

装幀　戸田ツトム
写真　立花義臣
カバー画　CLOVIS TROUILLE
本文カット　CARLO

¥1,100 —

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。
© 1987 Yoshikichi Furui, Yasuo Tanaka, Printed in Japan
ISBN4-8457-0283-5

フェティッシュな時代

古井由吉
Yoshikichi Furui
田中康夫
Yasuo Tanaka

un coup de don
〈贈与の一撃〉叢書 3
トレヴィル

YOSHIKICHI
FURUI

1937年、東京生まれ。
東京大学独文科修士
課程修了。
71年、『杏子』で芥川賞受賞。
80年、『栖』で日本文学大賞
受賞。83年、『槿』で谷崎賞
受賞。その他の著書に、処
女作『円陣を組む女たち』、
最近作に『裸々虫記』『眉雨』
『私という白道』（トレヴィ
ル刊）等がある。

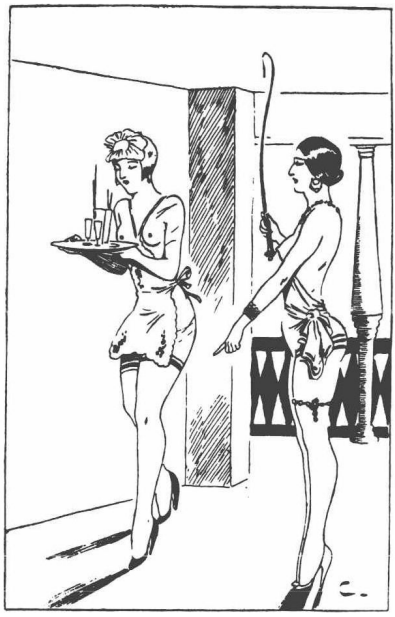
YASUO TANAKA

1956年、東京生まれ。
一橋大学法学部卒。
著書に『なんとなく、クリスタル』(文藝賞受賞)『ブリリアントな午後』『たまらなく、アーベイン』『ファディッシュ考現学'87』『昔みたい』『ハッピー・エンディング』(トレヴィル刊)、その他多数。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

Elles élevèrent vers lui leurs mains jointes.

PART 1



Les bras chargés d'un plateau...

La jupe était fendue...

田中康夫、〝フライデー体験〟を語る

古井◉どこから入って行きましょうか。「フライデー」の話なんか、とても面白いんだけど、まだ今日(編集部注1986・11・6)の段階では未確定情報だからね、公式には。

田中◉現物がないですとね。かなり写真は、弱い写真だと思いますけどね。

古井◉そうでしょう。そのタイトルでは……(編集部注〝田中康夫さんがSM体験した相手の「女性」〟「フライデー」一一月二一日号)

田中◉やっぱり、ホテルから出てきたところを赤外線で撮って、倍増して、だからボケボケなんだろうな。

古井◉この前のときはどうだったんですか。僕も話は聞いているけれど。

田中◉なに？　この前のって。

古井◉パーティのときに、エレベーターのなかで……

田中◉ああ、あれですね。創刊二号目のね。有楽町西武のオープニング・パーティがあったんですよ。それに、僕、文化出版局の「ミスター・ハイファッション」の編集長と一緒に行ってたんです。で、僕が昔付き合っていた、金田さんも一回、逢ったことのある女の子なんだけど、その

子が友達と来てて、なかで一緒になったんです。で、みんな一緒に見て回りはじめて、エレベーターに乗ったのかな。その瞬間の写真ですね。僕は撮られた記憶はないんですけど、文化出版局の人はビールかなんか持って、僕の横に立ってて、いま言った彼女も横に立ってて。それは堤清二氏以外に義明氏も来るんじゃないかと言われて、二人の対面場面を張ってた経済班のカメラマンだったんですね。で、焼いてみたら、一枚、それがあったと。それで、「フライデー」の、プレジデント社から移ってきた武田氏というデスクだったんですけど、その人が、フリーの女の子を二人ぐらい、その写真を持たせて一ヵ月間、この女は誰だといって回らせたんですって。田中康夫の『なんとなく、クリスタル』に出てくる店を軒並み。『なんとなく、クリスタル』を書いたのは、当時から三年半くらい前なんですけど、文京区には、どうもそのあとに僕の出した本は、日販や東販のコンピュータのミスで配本されなかったらしくて、『なんとなく、クリスタル』という渋谷区千駄ヶ谷の出版社が出した本だけ持って、そのなかに出たお店、全部回って、聞いたんですって。で、やっとわかったと。一ヵ月もかけて、われわれは調べたんですから、田中さんの恋人発覚という感じでスクープでやらせていただきたいと（笑）。

六本木に「キャンティ」という店があるんですけど、僕は当時、日航のスチュワーデスと付き合ってて、その子が、ブラジルまでいく二週間近くのフライトだったんで、空港まで送りに行って、帰ってきたの、東京に。

「家庭画報」に当時、僕、連載があったんで、その原稿を渡す為に六本木の「キャンティ」へ行

って、編集者と会ってたんですよね。で、原稿を渡したら、当時の六本木の「キャンティ」というのは、カメラマンの加納典明氏だとか、あと、TBSを辞めて、現場のスタッフを派遣する会社の副社長をやってる人。

このおじさんは面白いんですけど、朝、剣道をやりに行くんですよ、谷中に。それで、会社は午前中だけ出て、昼から、ソ連大使館の横の「クラークハッチ」って、ほら、チャック・ウイルソンがやっているスポーツジムに行くわけ。で、昼間は、「狸穴そば」か「本村庵」というところでソバを食べているのね、そのおじさんが。で、午後、また「クラークハッチ」へ行って、夕方は飯倉の「キャンティ」。誰か知っているのがいないかなと思って、マチャアキがいたりすると、話をしてて、夜は、夕方七時ぐらいから夜の十一時半ぐらいまで、六本木の「キャンティ」にずっといるみたいな、不思議なおじさん。

あと不動産屋をやっている、群馬のほうの北軽井沢の土地を買っちゃあ、それを別荘地にして売っているおじさんがいて、赤いベンツのツーシーターカーに乗っているんだけどね。それから今井俊満さんっていう画家がいますでしょう。そういう人たちが集まってて、そこに僕も僕の周りの女の子たちもよく行ってたんです。

僕の昔の子もその日、来てたわけですよ。だから、原稿を渡した後、みんなでワイワイしてたら、外でチカチカとパトカーが赤いのをつけているんですよね。喧嘩かなんかあったんで。で、なんだっていうんで、みんなでワーッと出ていったら、そこでパチパチパチッて撮られたわ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

け。

それで、なんだよって言ったら、「『フライデー』ですが」と、若い記者が言うの。「まあ、お楽しみにしててください」とかも言っているわけ。

張ってたんですね、「キャンティ」に僕がよく来るってことで。そうしたら、僕も入って、彼女も入ったんで、デスクに電話して、やっていいかと言ったらしい。

で、デスクが、僕が連絡したわけでもないのに、しばらくしたら、ヒョコヒョコ来たわけ。僕はとにかく、もう別れている子だから、「載っけても仕方ないよ」と言ったの。けれども、向こうは「スクープですから」と言い張ったのかな。

それで、日を改めて、今度は副編集長の高橋氏という人も入れて三人で会ったわけ。向うはやりたいというから、だけど、僕は、事実と違うのを載っけるのかと言ったわけ。そうしたら、われわれは、とにかく一カ月間、一所懸命頑張って、と繰り返すんですよ……

古井◉そこまで了承を求めるわけか。

田中◉初期だったですからね、彼らとしては。頑張ってやったんだからって。だけど、違うんだと言ったら、じゃあ、いまの新しい彼女とのデート場面を隠し撮りさせてくださいっていうから、バカヤロー、そんなのやってられないよと。そうしたら向うは、田中康夫が交通事故のときの子と純愛だと言って載っけたの。

で、それを、僕はその後、まあ黙ってたんだけども、約半年後、山城新伍さんと元オールナイ

ターズの一人が載ったわけ。「フォーカス」は、ちゃんと二人がホテルのエレベーターホールに深夜いた写真を撮っているわけ。「フライデー」は、その「フォーカス」の動きを知ってはじめたから、山城さんがテレビに出ている写真と、彼女が家から出てきた写真とを載っけているだけなんですよ。で、彼自身のコメントっていうのも、なにも載ってないわけ。知人の話で載ってて、全く全文推定で書いているわけですよ。

つまり、同じ日に「フォーカス」が出たから、読者はみんな、ああそうかって思うけど、出てなきゃ、全然、三原じゅん子の首から上をすげ替えたウラ本と同じ編集方法なわけですよね。その件を、僕は「朝日ジャーナル」に書いたときに、過去の話も全部書いたわけ。

そうしたら、「フライデー」側は非常に怒ったんですよね。デスクが、また電話をかけてきて、なんだっていうから、そのまた顛末を、僕は僕で「朝日ジャーナル」にまた書いてあげたの。

それと、あともう一個は、僕が昔付き合っていたある画廊の娘がいて、彼女が、落語家の桂三木助氏のマンションに遊びに行って、なかで彼の襲名披露のビデオかなんか見て、白金のマンションなんですけどね、出てきたら、駐車場でカメラマンがバチバチ撮ったわけ。

それは、そのマンションに、とんねるずの片割れが同棲してたんですよね。これを撮りたいと思って、彼らは日曜日の夜に張ってたんだけど、撮れなかったわけ。で、一般的には、月曜日入稿なんですね。あるいは火曜の夜、入稿なんですよ。

それで、とにかくネタがないから、で、フリーでやっているから出来高払いのギャラももらわ

なくちゃいけないから、とにかく、じゃあ、三木助が来たって撮ったわけ。でも、彼女のことはわからないわけですよ。「フライデー」側は、誰も。だけど、三木助は結局、自分にとっては、そういう、日本でも有数な画廊の娘と付き合っているというのが載ったほうがメリットがあるわけですよね、落語家としては。それで彼は、「フライデー」から金というか、取材費をもらって、全部彼女のことをしゃべったわけ。彼女にも、〝いや、「フライデー」は載っけないって言っているから、いちおう電話だけしてあげなよ〟って言って、電話を彼女は、素人だから、わからないから、したわけ。それで、「フライデー」はそれを記事にした。

で、その話も僕は「朝日ジャーナル」に書いたわけ。それは、僕は皮肉っぽく、つまり、いままでわれわれというのは、撮られ損、あるいはしゃべり損、コメントも、そういう場合は稿料をもらえなくて、ある意味では著作権の権利が薄かったところに、「フライデー」は、はじめて肖像権、しかもコメント著作権という画期的なものを取り入れた、やっぱりこれは日本における偉大な出版社であるということを書いたわけ。

だから向うは、非常に痛いところを突かれているわけ。頭にきているわけですよ、ずっと。おまけに田中康夫は、とにかく講談社から電話がかかってきたら、原稿依頼であろうとコメント依頼であろうと「私は講談社とは付き合いません」って言ってる。

古井◉結局、どの写真が載ったの？　前のとき。

田中◉前のときは、だから、そのエレベーターのなかで乗っている写真が載ったの。

古井◉エレベーターが写ってて、そのエレベーターの前に……

田中◉エレベーターがちょうど閉まりかけてて、僕がいて、彼女がいて、僕のこっち側には、ビールを持った「ミスター・ハイファッション」の編集長が立っているわけですよ。

古井◉そのエレベーターのなかで？　エレベーターの前には写真に写ってない場所があるわけよね。ロビーめいた、ちょっとした空間があるわけでしょう？　そこに人が大勢いるわけね。

田中◉いないです。だから、エレベーターが閉まるとき、パッと撮ったんじゃないかな、カメラマンが。

で、とにかく、そのときにも書いたんですが、あと高橋慶彦選手のやらせ事件というのがありましたでしょう。高橋慶彦という広島の野球選手のグルーピーだった女の子に「フライデー」が金を渡して、名古屋のときに、あらかじめ「フライデー」が張り込んでて写真を撮ったというのがあったんですよね。それを、広島側が、確かに女のことは知ってたけど、あれは、やらせだと言ったわけですね。そのときに、その「フライデー」側は、やらせにも、やっていいやらせと悪いやらせがあるって、なんか石川達三氏の「二つの自由」みたいなことを言ったわけですよ。

で、そのときにも、まだ若いファンの女を、そうやって手込めにするようなことは道義的に許されるんだろうかっていう、なんか修身の教科書みたいなことを書いたわけ。でも、その前のほうのページには、ノーパン喫茶の写真かなんか載っているわけ。

そこで、また俺が皮肉って、ノーパン喫茶の写真が載っているのを見て、昔は「キング」とか「少

年倶楽部」だかを、慰問袋に詰めてもらって、みんな戦場に行ったけど、再びキナ臭くなってきた今の世の中においては、また大日本雄弁会の、今度は「フライデー」や「ペントハウス」を戦場に送っても、こりゃ、いくらコーラが飲める時代になっても、みんな戦場で銃を持たねぇぜって書いたわけ。

正義感という名のヒステリー

古井◉面白がるのはいいんだけど、やっぱり、そこにヒステリーがあるんだよね。

田中◉だから、僕がね、基本的に言っているのは、もちろん事実じゃないことを載っけたりするのは論外だけど、それ以外にも僕がとにかくあそこでも書いたのは、反論の場のない人間を……、たとえば僕は、まだ少なくとも、反論の場があるわけです。でも例の三浦被告も、反論の場もあるのかもしれないけど、でも、それはあくまでも、疑惑のもとで、向うは取材に来ているんだから、非常にバイアスのかかってない状態での反論の場ではないわけですよね。で、少なくとも僕は、「朝日ジャーナル」だとか、あるいは他の雑誌でも書く場は持っているわけですね。と、全くの反論の場のない人間を、犯罪を犯したかどうかもあの段階ではわからない人間を載せて、黙って切ってしまうということは、僕は、それは暴力だっていうことを一貫して言ってたわけ。

あるいは「フライデー」の人達は、非常に感情的に、さっき言ったように、彼女の親御さんに対してどう思うんですかっていう正義をふりかざす。そんなの傑作ですよね。で、そのあと、デスクから、最後に電話が入ってて、昨日、今日とわれわれも努力したのに、ご協力いただけなくて

残念でありますと。その後、彼女には……最初、僕は彼女がしゃべったって知らないから、もし電話がかかってきて、しゃべったりすると、おまえがいちばん苦労するからねって言っているわけ。と、口止めの電話を、その後なさってないそうで、ほんとうに彼女がかわいそうだと思いますなんて。バカヤローッ、なにが……、ほんとうにそのへんが、やっぱり講談社って、田舎の出版社だなと、僕は思うんだけどね（笑）。

だって、彼の、それが、もう仙波久幸氏っていう記者の作戦ミスですよね。写真が、もうボケボケなんだったら、僕にそんな彼女から証言を取ったなんて言わないで、とにかく記事があるって言って、僕があわてて出ていったら、写真を見せて、そうだなって言って、そのあと、彼女のテープを聞かせれば、全然違う日付のであっても、もう記事になるわけでしょう。だから、もう手の内を全部明かしてって、まあ正直と言えば正直な出版社だけど、ちょっとそういう雑誌をやっているにしちゃ、トロいスタッフだなと思ったね。

古井◉トロいし、なんか世間のある風向きと見合ってはいるね。つまり、暴露記事でしょう。もとは、面白いというだけよね。

田中◉変な正義感ですよね。

古井◉正義感が絡むんだ。

田中◉で、ただ、僕は、写真雑誌を、また批判する人達も、変な硬直した正義感でしかないと思うんです。たとえば森村誠一氏が、この間、朝日新聞に書いてたのは正論だけども、あれも考え

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo